



つながる心

よく生きること、よく死ぬこと

先週、「よく生きること、よく死ぬこと」という教材を使って、「生命の尊さ」をテーマにした道徳の授業を行いました。

筆者の沼野尚美さんは、長年病院のホスピスに勤めていました。そこで余命わずかな患者の方々と接してきて、生きることや死ぬことについて深く考えるようになります。そんな中でも、特にヨッチャンという16歳の女の子との出会いが、今も強く印象に残っています。

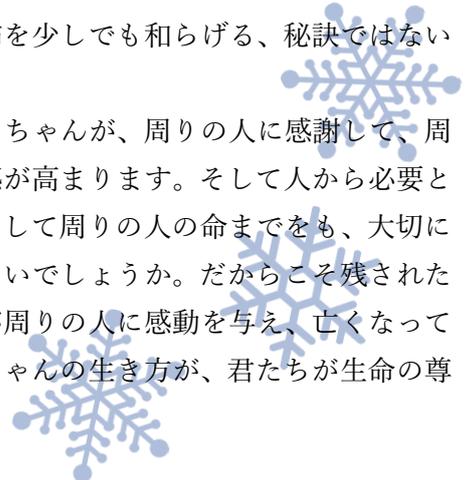
ヨッチャンは頭に癌ができて入院していました。日に日に体がマヒしてくるにつれて、ヨッチャンは死を意識するようになります。それによって、「死んだらどうなるのか」、「なぜ自分だけ、こんなに早く死なないといけないのか」などの問いが、何度も心の中で繰り返されます。しかしその一方で、病気になったからこそ気がついたことや、病気になってよかったことを、沼野さんに打ち明けてくれるようになります。そんなヨッチャンを家族や友達、病院の人たちはしっかり支えます。それによって、死への恐怖が徐々に少なくなり、穏やかに残り少ない毎日を、過ごすことができるようになります。そして、死んでもみんなの心の中で生き続けることができ、またいつか天国で出会えると信じられるようになって、それがヨッチャンの希望へと変わります。最後にヨッチャンはみんなに「ありがとう」と言って、安らかな気持ちで旅立っていきます。

「人間は自らの死を覚悟し、死の可能性と向き合うことによって、一回限りの人生を真剣に生きることをの意味を見出すことができる。」by ハイデッガー。「死の準備をするということは、充実した人生を送ることだ。人生の充実によって死の恐怖は和らぎ、安らかに死を迎えられる。」by トルストイ。これらの哲学者の言葉にもあるように、人間は死を通して生きることを意味を、ずっと模索し続けてきました。

最近谷村新司さんを初め、70代の有名人の方の訃報を耳にするたびに、私自身今まで以上に死を身近に感じるようになりました。死は人に恐怖を与えます。その恐怖を少しでも和らげるためにはどうすればいいのか、それは残された人生をどう生きるかに、かかっているように思います。

命は無限に続くものではありません。誰もが必ず死を迎えます。それは当たり前のことですが、だからこそ死を迎えるまでの人生を、どれだけ有意義なものにしていくのが、死の恐怖を少しでも和らげる、秘訣ではないかと思います。

ヨッチャンは周りの人たちに、とても愛されていました。ただそれはヨッチャンが、周りの人に感謝して、周りの人を愛したからだだと思います。人は人から大切にされると、自己有用感が高まります。そして人から必要とされると、自分の存在を肯定できるようになり、そのことが自分の命を、そして周りの人の命までも、大切にようになります。きっとヨッチャンもそんなことに、気づいたのではないのでしょうか。だからこそ残された僅かな命を、精一杯生きようとしたのではないのでしょうか。そしてその姿が周りの人に感動を与え、亡くなっても周りの人の心に、生き続けるようになったように思います。そんなヨッチャンの生き方が、君たちが生命の尊さについて考える、きっかけになってくれるとうれしいです。



来週の予定

18日(月)	19日(火)	20日(水)	21日(木)	22日(金)	25日(月)
・生徒会朝礼			・展示発表会実行委員会	・避難訓練 ④⑤カット ・大掃除(体育着登校) ・給食(終)	・終業式 ・11:25 下校

